

入った小豆の量で作物の豊凶を占う。粥占いには神職は参加せず、自治会、各班の当番を中心に行う。占いの対象となる作物は、「麻、菜種、大麦、小麦、草種、大豆、小豆、ひえ、とうきび、木綿、いも、そば、大根、早稲、中稲、晚稲、上田、下田、蚕、一切草木」の二〇種である。上田、下田はそれぞれ輪中堤防内、堤防外の水田を指す。二〇種のうち畑作物は、麻、木綿、とうきび、大根、いもの五種のみである。蚕、一切草木を除く作物の多くは、田、あるいは田の畔で作られる。このように十六町においては、粥占いの対象は田作物が中心となる。

これらの作物は、現在ではほとんど作付されていない。昭和初期の農耕の聞取りによると、これらの作物を作付する際特に注意が必要なのは、小麦、大麦、蕎麦などの裏作物と稲作の切り替えである。麦や蕎麦を作付するには、耕地が乾燥している必要がある。しかし周辺に湛水中の水田があると、水がにじみ耕地が濡れてしまう。十六町では、耕地の所有が分散しているため、周辺耕地の所有者と作業日程の相談が必須となる。このように作付は個人の問題ではなく集団の問題となっている。

以上の検討から、十六町の粥占いは、以下のように分析できる。（１）水の規制を強く受けるため、水は人間を越えた存在とされており、粥占いはそれに対処する判断基準の一つであること。（２）町単位で粥占いを行うことによって、水の神意のもとで作付を行う事を成員全体で確認する。そして結果に基づいた協議の上で作付が工夫される。これによって作付は個々人の勝手を離れ、稲作農耕は強い協調性を持つ。

このように十六町の粥占いには、水を人間とは別次元に置

き、それを共同で認識した上で作付する仕組みがあった。これは水防と水利利用のはざまで生きる人々の工夫と言える。

流行神をめぐる一考察

黄 緑 萍

本発表では、二〇〇三年から急に流行り出した「幸運の女神」、「福の神仙台四郎の現代版」とされる仙台幸子を事例として取り上げ、その信仰の展開過程を把握した。その際には、流行神に関する先行研究の指摘に留意し、それとの比較に立つて特徴を考察した。

仙台幸子とは、実在の人物を元に作られた幸運を呼ぶとされるキャラクターである。そのキャラクターとなった人物は「幸子」という名の女性である。実の娘の峰ハチヨが二〇〇一年から自分のホームページに、母の立ち寄る所に人が押し寄せてくるというエピソードを載せ、仙台四郎に因んで「仙台幸子」と命名した。二〇〇三年には東北放送のラジオで報道され、それをきっかけに峰ハチヨは「幸子」の一歳頃の写真を使った新たなグッズを製作した。これが頒布されると「ご利益があった」との声が寄せられてきた。その後、仙台幸子は次々とメディアに取り上げられ、広く知られるようになった。しかし二〇〇六年からその報道は減少し、二〇一〇年以降になるとメディアからはほとんど取り上げられなくなった。

本発表は仙台幸子の展開過程、幸子本人の特徴及び購入者の

ご利益情報の内容を分析した上で、従来流行神とされてきた神仏と比較してその特徴をまとめた。①出現形態。宮田登は寺院の境内仏に特別な霊験を付与して、流行神仏となった例の他、一般に流行神仏の出現の仕方には、土中出現型・空中飛来型・海上漂着型の三タイプがあると述べたが（宮田登『近世の流行神』一九七二、三二）、仙台幸子の場合はそのいずれにも属せず、インターネットというバーチャルな世界から始まった。これはまさに、インターネットが普及している現代ならではの出現過程と言える。②宗教者の関与。流行神が展開していく場合、必ず神や仏の新しい霊験を創作する宗教者が介在している。と宮田は論じた（同前、二八）。この点、鈴木岩弓が取り上げた「首無地蔵」や「横樋観音」の事例においても、民間宗教者の関与が確認された（鈴木岩弓『流行神』の形成とその展開に関する実証的研究——中国地方の事例を中心に——一九九二、四五）。それに対して、仙台幸子の場合には全く宗教者が関与せず、仙台幸子の情報を世に知らせたのは俗人の実の娘であった。娘の峰ハチヨは従来の民間宗教者と同じように、仙台幸子の「霊験」を世に知らしめる役割を果たしてきた。③信仰者の関わり方。これまで指摘されてきた流行神の事例からは、信仰者と神仏との関わり方はどれも「参詣」を通じてなされていた。それゆえ、参詣者の多寡から流行りの度合いを把握することも可能であった。この点仙台幸子の場合はその鎮座地がないため、「参詣」のような行動が確認できなかった。神仏に対して人が関わる現実空間がない点は、従来の流行神にはみられない点である。

総じて言えば、仙台幸子が流行していった過程において、インターネットは重要な役割を果たしていた。インターネットを通じること、人と神仏との関わり方に変化が生じ、「参詣」を通じた直接接触が不要となったのである。仙台幸子の流行からは、現代人が抱えている「神仏の所に行かなくても、ご利益があれば」という現世利益志向を伺うことができる。今後は、インターネットというバーチャル空間における信仰のあり方に注目する必要があると考える。

祝（ハフリ）と動物供儀

鈴木良幸

「ハフリ」「ホオリ」「ハオリ」などの呼称は、銀鏡神社（宮崎県西都市）、諏訪大社（長野県諏訪市と茅野市）、愛知県北設楽郡の数社、大山祇神社（愛媛県越智郡大三嶋町）などに残る、または残っていたことが知られる。さらに柳田によれば、山間部や諸島などに点在してつたわっている（柳田国男『定本柳田国男集第十巻』筑摩書房、一九六九、二七五―二七七）。

動物供儀には、屠り（ハフリ）がついてまわる。古代において、あるものの死には、さまざまな祟りや恨みが作用していると考えられた。動物の死には、人間の行ないによる祟りや恨みなど、さまざまな要素が凝縮されて結果する。それは乱獲や独占などの例をあげるまでもなく、人間と動物のみならず、動物を取り巻く人間と人間の間にも複合して関連しうる。このよう